

「三人の父」 —— 学問と信仰の間（はざま）で ——

松本 滋

はじめに——「三人の父」とは

暮れの大変お忙しい中、またお寒い中、嘲風会のフォーラムにお集まりいただき、また私のようなものの話を聞いて下さろうと駆けつけていただいて、誠に有り難うございます。私はこのところ、学会も研究室も、したがって嘲風会も、ご無沙汰ばかりしております、年齢の上の方は別として、若い方は今日初めて顔を見る、本は見たことあるけどもう過去の人じゃないかと、（確かに過去の人なんですが、）そういう風に思われている方がおられるかと思えます。この中に女性の方は別として、30以前の方、いらっしゃいますか。四、五人いるんですね。院生ですか。そういう方には、私の顔も話も、初めてじゃないかと思われま。

さてそれはともかくとして、今日はいつもの12月23日の会と違いまして、研究発表などというようなことはいたしません。これはあらかじめ、島菌先生から依頼があったときにお断りしたんです。私は研究らしい研究もしてないし、今はもうそういう話もできないので、質問を後で受けても答えないと。それは「助さん格さん」よろしく両隣りに控えておられるお二人にお願いして、代わりに答えてもらうという形になるかと思えます。いずれにしても、今日は「フォーラム」ということになりますので、気楽に話させていただきたいと思えます。

今日の「三人の父」というテーマは、私がこれをメインに付けたものではないんです。私が申し出たのは、「学問と信仰の間（はざま）で」という題で、副題が「三人の父の物語」だったのですが、どういうわけか研究室のスタッフの方が、その「三人の父」の部分を中心主題にされたのです。こ

のほうが、よりアトラクティブに聞こえるだろうというお計らいだと思って、私はそれでよしとしました。

そういうわけで、「三人の父」ということですが、最初に種明かしをしておきますと、“父”というのは、私の持論では、複数あっていい。母親はまあ一人でも、父親は複数あっていいという立場です。その「父親」というのは、一人の人間が、「外的空間」の中で成長していく過程で、大所高所から、精神的支えになって、そして生き方の基本的な方向付けを与えてくれる存在。難しく言うとそういう風に定義できましようか。個人の精神的成長の大事な節目に、人生の基本的な方向付けを与えてくれるような存在を「父なるもの」と、呼んでおきます。

その“三人”というのは、年代の順番からいいますと、先ず私の父親です。松本栄吉といいます。明治22年（1889年）生まれで、亡くなったのは昭和49年（1974年）で、享年86歳でした。それからもう一人は、私の恩師、岸本英夫先生です。この方については、御存じの方が多いと思いますが、生まれは1903年で、亡くなったのが1964年、昭和39年であります。その時、61歳でした。それから更にもう一人が、中山正善、天理教二代真柱です。天理教のことを御存じの方はよくお分かりですが、「真柱」というのは教団の中心的存在です。教祖の孫が初代真柱で、二代真柱はその子供ですから曾孫っていうんですかね。この方は1905年から1967年まで生き、享年は63歳だったと思います。具体的にはこの三人なんですが、それぞれと私の関わりについて、細かく述べれば時間がいくらあっても足りません。皆さんがたも

聞いてもなんにも面白くないと思います。

で、私が今日お話ししたいのは、私という一個人の人間が、特に20代、20歳代の時に、学問と信仰の間（はざま）で、悪戦苦闘した、その心の軌跡であります。私は学問の世界と、信仰の世界の間に生きた人間であります、そのどっちにも徹底することなく、まあ何とか生きてきたようなものです。それがどうしてそうなったかという話をしたいと思います。しかしそれは、単なる個人的な問題を越えて、宗教学という、皆さん方が専攻されている学問分野のもつ、ある意味で宿命的な課題とも関連しているかと思うのです。皆さん方の中にはいろいろな宗教に関わりを持っている方も、持たない方もおられるかと思いますが、広い意味での「宗教」あるいは信仰というものは、それぞれが主体的にお考えのことが多いと思います。

それともう一つ、それに加えて今から約四、五十年前の、東大の宗教学研究室の様態といえますか、状況についても、話していきたいと思います。まあ約半世紀近く前の物語と言えましょう。今日は幸い、脇本、井門という大先輩がおいで下さっています。また私とほぼ同じ世代の、宮田、宮家という方々も来ておられますので、間違っていたら訂正していただきたいのですが、私の見た、あるいは経験した限りにおける、岸本先生を中心とした、東大宗教学のあり方にも、触れてまいりますので、ご参考にしていただきたいと思います。

§. 学問（科学）と宗教——三つの立場

さて、最初に少し堅い話をしますと、学問と宗教との関わりについて、私は、三つの立場というか、捉え方があるかと思っております。第一番目は、宗教というものは前近代的なもので、これからの時代は、学問特に科学が（科学の中には自然科学の他に社会科学も含まれますが、）これからの人間の生き方を方向付けるというかその拠り所になるという立場です。ご承知の通り、過去においては宗教は人間生活のすべての領域を支配していた。経済も政治も法律も道徳も芸術も、宗教に関わりなしにはあり得なかった。その時代からだんだん時代を経て、そういう領域が分化して、そして特に近代科学の発達以降は、宗教というもの

はその独自の機能は何かということが問われるようになってきたことはご承知の通りで、行き着くところは宗教不要論にまでなります。その典型的な例がマルクスの宗教阿片説であり、フロイトの宗教幼児神経症説であることは申すまでもありません。

二番目の立場というのは、学問あるいは科学と宗教は、本質的に次元が違うという立場です。これは科学を取り上げたほうが分かりやすいんですが、いかに科学が発達しても、それによって宗教が無用になることはない、無意味になることはない。学問的な成果あるいは知識を、いかに積み重ねても、宗教信仰には達しない、という立場です。つまり言い換えると、両者の間には根本的な次元の相違がある。両者は平行線上にある。交わることがない。学問の世界と信仰の世界は、自然につながるといっても、一つの立場から他の立場に移るには、リープというかジャンプ（飛躍）が必要である、という立場です。言葉を換えると、客観的な事実の追求と、信仰的な真実の把握とは、本来違うものだという立場ですね。

三番目の立場というか捉え方は、学問あるいは科学と宗教は、究極的には一致するという立場です。これは両面からの言い方があると思います。宗教の立場から、あるいは信仰の立場からいうと、学問や科学がいくら発達しても、それは結局宗教の主張の真実性、正当性を証明することになる。究極的には、宗教のいうことが、学問的にあとづけられることになる、という言い方もできるかと思えます。学問の立場からいっても、超一流の科学者、例えばニュートン、アインシュタインとかユングなどは、真理というものの涯しなさに対して非常に謙虚な態度を持っていることはご承知の通りです。未知なるものの涯しなさを前にして、科学者といえども何か宗教的なものの考え方になることが多い。まあそういう態度ですね。ロバート・ベラーも、こういう言葉でそれを表現しています。「科学と宗教にはそれぞれ目的、行動様式がある。しかし両者とも、人間の営みの全体の中の、不可欠な部分をなしている。その全体性の中で統合されていく時代になっている」と、というような表現ですね。つまり人間が一つだから、究極

的な真理も一つになるだろう、という立場だと思われます。

§. 宗教学科を選んだ動機

以上の三つの立場は、極端に言ったのですが、個人としてみると、誰でもそれぞれ、そのどれかを選び取って生きていくことになると思えます。今現在、皆さん方がどういう考え、立場でおられるか分かりませんが、年齢に応じて変わる、移行することも多々あります。こう言う私自身、先ほど言ったように20歳代のことをこれから話しますが、20代はまさに、そういう移行、轉換を経験した時代でありました。

さてそこから私のライフヒストリーに入るんですが、お手元に、略歴を用意していただいたのでそれをちょっと参考にしていただきたいと思います。私は東京生まれで、中学だけ天理に行きました。しかしまたそれが嫌になって東京に帰ってきて、都立日比谷高校、当時は府立一中とか一高と言われた所に入りまして、そして東大の、なんと文一に入ったんです。文科一類になぜ入ったかという、文二より難しそうだからという単純な理由です(笑)。何を選ぼうとしたか、なんのために文一に入ったか今もって分からないんです。ただ理科と文科を比較したら、まあ自分の選択肢は文科だと。文科の中でもより難しいものは文一だ、というので、単純に入ったのが文一なんです。そのおかげで、後の有名官僚、例えば大蔵省主計局長とか、キヨスクの社長とか、いろいろなエリートと同級になりました。今でも時々同窓会をやるのです。そういう訳で、文一に入って、最初の一年半、ドイツ語クラスにいたのですが、そこから文二へ転科したのは私を含めて二人しかいませんでした。つまりそう言うは何だけど、文二のほうがより入りやすいんです。しかもですね、文二の中でも、宗教学科を選んだ。これが、昭和28年です。文一より易しいとは言っても、前年度(昭和27年度)後半は、文学部進学のための必修単位取得で大変でした。一回も出席しないで単位をもらったり、なんかしてとにかく単位をそろえて、宗教学科に滑り込んだのです。

では、なぜ宗教学科を選んだかということになり

ますと、二つ理由がありました。一つは、自分の父親、松本栄吉が、天理教の教会長であり、しかも祖父の代から、教会をやっていた。教会創立は明治26年ですから、もうしばらくすると百十年になります。そういう古い教会の、会長を父がやってまして、私はその後継者と目されていたんです。しかし自分はやりたくなかった。信仰もありませんでした。「門前の小僧習わぬ経」は、読んでおりました。ただ、私は父親の生きている姿を見ると、どうしてもこの父親にだけは悲しい思いをさせたくないという気持ちが常に心の根底にあったのです。その父親は、私になんにも言わないんです。ただ黙々と、信仰生活を営んでいる。お前は教会のことをやれとか、あるいは何をせよとかいうことを、絶対に一度も言ったことがありません。それだけに私もつらかったことがあります。

そこで私が宗教学科を選んだのは、法律や経済を学んで弁護士や裁判官や官僚になるよりも、まだ宗教学をやった方が宗教により近い生き方ができるだろうと思ったからです。むしろ宗教学を勉強して、宗教が下らないものならそれを批判して、自分の生き方を決めようというのが、正直言って宗教学科を選んだ動機だったように思われます。そこには、ある意味で自分の内に染み込んだ天理教的な要素との対決という、まあなんとするか若気の至りとも言える気持ちがあったことは否めません。

私はこれが、自分独特のことかと思っておりましたら、このあいだ今日の講演の準備の一環で、岸本英夫集の第何巻でしたかね、6巻でしたか、高木きよ子さんの解説を読んでましたら、岸本先生自身の心の内に、宗教を学問的に見極めることによって、宗教の「正体」を掴みたいという意識が潜んでいたのではないかと書いておられました。つまり岸本先生は、キリスト教の家庭に育てられたのですが、キリスト教の教義とか体質になじめなかった。しかし、さりとて宗教そのものは捨てるにしのびず、それを学問的に見極めることによって宗教の「正体」を掴もうという動機で、宗教学科をやられたのではないかと高木きよ子さんは書いておられる。それが目に触れたんです。ああそうか、岸本先生にもそういうところがあった

のか、と改めて思いました。

さて、以上が、自分が宗教学を選んだ一つの動機ですが、もう一つの動機がありました。それは、二代真柱中山正善という方が、ご承知の方もおられますけれども、東大の宗教学のOBなんです。確か昭和4年頃の卒業です。岸本先生と二、三年違う後輩ですけれども、まあ同窓の友人といった意識が非常に強く、卒業後も交流の密度が非常に高かったのです。その頃同窓生の中には、有名な古野清人先生、石津照璽先生、大島清先生、増谷文雄先生というような、皆さん方も本ではお目にかかっているであろう、錚々たるメンバーがひしめいていたのです。その時代に、姉崎門下で宗教学を勉強して、卒業した、これが中山正善という、天理教二代真柱です。私にとっては天理教の真柱という以外にも、嘲風会の先輩という面も持っていた、そういう方です。しかも、その子息、というか三代真柱ですが、その方と私は同学年、天理中学で机を並べた仲でもあります。今の真柱はまた四代に代わってます。それから私の姉の夫、義理の兄が、二代真柱の秘書みたいのを長くやりましたので、二代は特別に、私のことを目にかけてくれていたようです。それで私が宗教学を選ぼうとした時に、義兄が二代真柱の耳に入れたところ、ああそれはいい、それはやれ是非やれ、良い先生がいる、岸本といういい先生がいるから是非行け、と薦められた経緯もあったのです。

§. 岸本宗教学から学んだこと

さて、この昭和28年、1953年の4月に進学いたしましたして、宗教学を学び始めるんですが、当時は駒場から本郷へ、新制になってから宗教学科へ進学するものが余りいなかったんです。まあ宗教学など志望する者はあまりいなかった。私と、もう一人友達の後藤光一郎（元宗教学宗教史学科教授）、この二人だけだったのです。後にも、先にもない。結局この二人だけで、確か一年おいて藺田稔、中村廣治郎の二人が来たと思いますけれども、まあそんな程度でした。ところが、先生の方とは言えば岸本英夫教授、大島清助教授、それから、講師に増谷文雄（東京外語大学教授）、小口偉一（東京大学社会科学研究所）、窪徳忠（東洋文化

研究所）、今日お出にならなくてほっとしましたけれども（笑）、こういうお歴々が講師でおられた。それで助手には脇本平也って方がおられたんですね（笑）。それから、特別研究生という、まあ助手の手伝いみたいなことをしてる人がいまして、それが田丸徳善という方でした。その他にもおられましたけど、とにかく今思うとすごい顔ぶれのスタッフが揃っていて、駒場から進学した学生は私と後藤のたった二人でしたからずいぶん可愛がって頂きました。可愛がられて、搾られて（笑）、ご馳走にもなって、とてもいい思いをしたと思います。当時の東大の月謝は、確か360円かなんかでしたかねえ、だいぶ得したんですよ。3600円かな、桁が違うな（笑）。

忘れもしないのは、岸本先生が、私たち二人が進学して最初の対面の折に研究室、今も大して変わっていない、あの古めかしい研究室で、話されたことです。その話がですね、開口一番、よく宗教学科にいらしたと。「だけど宗教学やっても食べられませんよ、いいですか、だから入る人は少ないんです。」しかしそれでいいんだと。少しでも、細々とでも、宗教学をやる人がいるということが大切なんだと、まあそのように言われたことは今でもよく覚えています。食える学問じゃありません。これは皆さん方も痛いほど経験されているでしょう（笑）。オーバードクターもたくさんいるしね。もうオーバードクターも過ぎて、またオーバーしてもなかなか定職がないという方も少なくない。まあそれは宗教学に限りませんが、それでも、宗教学は少なくともいいんだ、と岸本先生は言われたのです。今幸か不幸か、と言って悪ければ幸いなことに学生数が多いようですけれど、かりに少なくてもいいから、細々とでも続けられる人がいてくれればいいということをおっしゃった。正直、その時はびんとこなかったんです。私は親のすねばかりかじってましたから、食えないということはどういうことか、あまり意味が分からなかったけど、今思うと、本当によく先生は図星を指しておられたということを感じます。

それで、4月からゼミが始まって、ウィリアム・ジェームズの「バライアティーズ」を読んだのですが、半年の間に全部読んでしまった。翻訳なし

で英文のテキストです。岸本先生はそれでアメリカへ行かれてしまったのです。その年の秋でしたか夏でしたか。それから私は一年半、大島先生について勉強したのです。まその辺の話すると長くなりますから省きますけれども、卒論はいよいよ書いたという感じです。早目に卒論を片づけて卒業するのですが、その卒業する直前に岸本先生は帰ってこられた。その辺の経緯は先生の著書をご覧になれば分かるように、癌との戦いが始まったところです。岸本先生は、昭和28年にアメリカへ行かれて、スタンフォード大学で一年間の講義をされ、その予定が延びている時に、——間違ったら後で訂正して下さい、——癌が発見されて、秋にアメリカで大手術を受けられた。先生の『死を見つめる心』に詳しく書かれてあります。それで帰ってこられた。ですから私は、(進学後)2、3か月はお目にかかってお世話になったけれど、あまり知らないうちに卒業してしまいました。

それはともかく、その後私はどうしてもやっぱり岸本先生のもとで勉強したいと思って、修士課程では思い切って宗教心理学一本に絞ったのです。それまでは、イスラム教をやっていました。なぜやったかという、なにか宗教史をやらなきゃならないような雰囲気があって、そのためにアラビア語をやらされたりサンスクリットをやったり、あのパーリまでやったり、今になるとずいぶん無駄な時間を使ったと思います(笑)。印哲の学生には、サンスクリット、パーリじゃかなわないんですけど、とにかくやったんです。特にアラビックなんてのは、わけ分からない。それでもまあ、少しは後のためにもなりました。

岸本先生につくことになってから、私に対して、先生は、こう言われたんです。私が天理教だというのを知っておられて、私自身は信じてはいなかった頃ですけど、「自分の宗教は括弧に入れ、後回しにせよ」、ということです。これを徹底して言われました。私は先ほど言いましたように、宗教特に天理教をむしろ批判するために宗教学を選んだつもりでした。けれども、先生から教えていただいたことの第一は、宗教を、どんな宗教でも、温かい目で見ると、ということでした。つまり、進学の動機は宗教批判でしたが、岸本先生に

師事しているうちにだんだん宗教理解へと自分の心が変わっていったんです。まあ理解したと言っても信仰するわけではないのですが、先ずそういう面から岸本先生に影響を受けました。因みに岸本英夫集の第1巻で柳川啓一氏が解説の中で、こういうことを言っています。「岸本宗教学の『味』として感じられるものの正体が、信者の心へのシンパシー、共感にあったように思われる」(309頁) そういう風に書いておられます。

これは余談ですが、岸本ゼミでは、主として大学院に入ってからでしたけれども、岸本先生は学生のことを名前ではまず呼ばれないんです。松本とか、金井だとか、名前では呼ばれません。あだ名なんです。そのあだ名を付けるのが、絶妙に上手だったですね。例えば宮崎というのが、ドルー神学校出たら「ドルウ」、それから、吉田というのが「ユダヤ教の神様」、池田昭という宗教社会学の方いますね、あの人は「ネジャカ」というあだ名でした。ここにおいでになっている宮家先生は「山伏」。それから窪徳忠先生は「地獄の門番」。これなどよく言い得てる？(笑) 今日おられなくてよかったですけどもね(笑)。故赤司道雄先生は「さばきの名人」、宮田元先生は、「マアママ」、これもまあまあですか(笑)。私は「ぼうちゃ」でした。で、ゼミの発表順番を、池田とか松本とか書かないで「ネジャカ」とか、「ぼうちゃ」だとか書いて、名前を時々忘れられることもあるぐらい、まあそんな愉快なゼミを経験しました。今の金井先生や島藺先生が学生の人たちをあだ名で呼んでるかどうか分かりませんが、学生にとっては非常に親しみが深かったですね。

それから今日お配りした参考資料(私の著書からコピーして取ったもの)にも記してありますが、私が岸本先生に師事した昭和30年代、——それは先生が癌と闘いながら宗教学の学問体系の構築に人生最後の力を振り絞っておられた時代でしたが、——そのころ先生から徹底的に叩き込まれたことが三つあります。一つは今言ったこと、つまり、「宗教現象を人間の営みとして広く暖かい目で見つめること」です。二番目は、宗教現象をよく分析、理解するためには、生の素材にじかに、素手でかぶりついては駄目だ、「まずそれを切り

さばくための『包丁』をしっかりと研ぎ揃えよ」ということです。岸本先生は、重箱の隅つついたような資料を集めてきて発表しても、ご機嫌よくなかった。柳川啓一氏が、——柳川先生のことはたいがいの人々が知ってると思うのですが、先ほど手を挙げた30歳以下の人には、故人でもありますし、すでに伝説上の人物になりつつあるんじゃないかと私は思ってます、——その方があるところに書かれたのに、「社会学・心理学・文化人類学・民族学・精神分析学等々、人文社会科学において宗教に触れた学説の目ぼしいものを、次々に摂取し、排泄し、処分した」とあります。私もそのようなことをやったわけです。これも「包丁」、あるいは方法論的視点を求めての懸命の努力だったのです。この辺はここにお出いただいている井門先生のほうがずっとはるかに進んでおられたと思います

三番目の点は、「研究成果を発表するに際しては、平易明快な文章で表現せよ」ということです。これは、文章もさることながら、口頭発表の言葉や仕方が、もたもたとして分かりにくいと、叱られました。内容があれば表現なんかどうでもいいというようなことは先ず許されませんでした。文章が長々しくて分かりにくい人、これも落第です。身に覚えがあったら、ちょっと反省して下さい。口頭発表でも、何しろ論旨不明だと絶対に駄目なんです。先生が学生の発表聞いておられる時、その当時煙草を吸っておられたのですが、その手が震えてくるんです。すると、あー来た来た来た、と分かるのです。いらいらしておられるのがよく分かる。それからしばらくすると雷が落ちてくる。だから発表は非常に明快でなければいけない。それから文章も明快でなくてはいけません。岸本先生の書かれた文章をお読みになれば、すっと一遍で分かります。その伝統を受け継いでおられてるのが脇本先生ですね。脇本先生の文章も非常に分かりやすく、しかも文学的です。この間も、脇本先生が解説に書いておられた文章を、今回のことで改めて読ませてもらったのですけれども、非常に感激したものです。いずれにしましてもそういうわけで、この三点を叩き込まれたということをや、嘲風会の席ですので、お伝えさせていただきたい

と思うんです。これらは東大宗教学の大切な伝統だと私は思っています。

さて、私は、宗教学徒っていいですか、宗教学の学生、研究者としては、非常に恵まれた、いくなれば順調なコースを、歩んでいたと思います。少なくとも昭和36年、1961年まではです。つまり20代後半、28歳頃までの話です。昭和28年に進学して、30年に卒業して、修士課程に入って、E・フロムをやって修論を書いて、それから誰もそうですが、昭和32年から3年間の博士課程に入りました。つまり二年の修士課程と、三年の博士課程、最短五年で、すぐ直後に助手に抜擢されたのです。ですから当時としては、文学部の助手の中で一番若手の方でした。それをなぜ言うかということ、それが後の話の伏線になるからです。

その昭和32年から35年、1957年から1960年の間、私は博士課程にいたんです。今もこの中にいらっしやると思いますが、博士課程の時は、本当に勉強したい時だと思います。またできる時だと思うんですが、当時の東大の宗教学研究室は、奨学金をもらうものは絶対に奉仕しなくてはいけない。奉仕というのも変だけれど、要するに研究室の事務の手伝いを必ずするんです。こういう決まりになっていました。もっとも決まりというより、光栄で、喜んでやらせてもらったものです。ですから助手はもう左うちわです。今の助手さんはどうか分かりませんが、学生が、特に院生が、お茶を入れるし、片づけもする。いつも、研究室を汚したことなどなかったです。お掃除のおばさんも来たけれども、お茶碗は大抵自分で洗って、お茶も入れて差し上げる、そんなことは当たり前でした。

まあそんなこんなでありましたが、それよりもっと大変だったのは、1958年、昭和33年のことです。そのころは皆さん方いくつだったか、生まれてたかどうか分かりませんが、とにかく1958年、昭和33年という年は、ある意味で画期的な年だったのです。それは私個人にとっても、結婚した年ですから非常に画期的なんです(笑)、窪先生が来ておられると、なに冷やかされるか分からないようなことをしていました。まあそれはともかく、その年の8月に、第9回国際宗教学宗教史

会議が東京で行われたのです。近いうちに国際宗教学会議が日本で開催されるという話、そして東大がその時当番校になるというような話を、漏れ承っていますけれど、これは大変なことですよ。そのころの会長は宮家さんか誰か分かりませんが、少くとも東大の宗教学のスタッフは覚悟していないといけません。

とにかく1958年の時は、岸本先生がいなくてはできない、周りは今と違って国際的に活躍している人、英語の堪能な人が非常に少なく、岸本先生だけが頼りで、無理に実行委員長を押しつけられた。先ほど言いましたように、先生は癌の手術の直後ですから、体力的には大変だけれども、岸本先生はそれを引き受けられたのです。引き受けられて、私はその下請け、「下請け」というのは変だけれども、事務方の、まあなんていうか元締めみたいな立場に置かれたんです。ただじゃないですよ、ほんの少しお手当を頂きました。事務方というとなんか今言葉がおかしいんですが、岸本委員長付の事務方をやらされた。当時の助手は久我和夫というお方ですが、その方はあまり国際会議にはタッチしなかった。ともかく私は大学院の博士課程は殆ど、国際会議の準備の仕事に忙しかったのですが、やらされたというより、やることを喜びとしていました。

これも余談になりますが、岸本先生はあだ名の他にもいろんなものに命名するのが好きですから、当時、その国際会議の開催に当たって自分の手足になる有能な人をそろえられた。そのメンバーを称して「七人の侍」と名付けられました。「七人の侍」、皆さん方からいえば大先輩ですが、ここにおられる脇本先生、それから國學院にいらした戸田義雄先生、それから立教におられて亡くなられましたが赤司道雄先生。それから先ほど言った英語の堪能な宮崎、「ドルウ」っていう人ですね。さらに、学術会議の課長の渡辺という人と、係長の長谷川という人、それに私を含めての七人です。でこの「七人の侍」という実働隊で当たれば何でもできるっていうことで、まあこの七人は、こき使われましたね。脇本先生は経験者ですからお分かりです。そこに柳川という名前が出てこないでしょ。柳川先生も当時まだ東大ではありませんで

したが、いらしたんです、けれども、岸本先生は柳川は温存するというお考えだったらしいんです。それではしかし、他はつぶしてもいいのかというような話になりますが(笑)。でも、柳川は、とにかく使わない。それはまあ、先の話があるので、よく分かるんです。いずれにしても、その時は、私が足の怪我をしたアクシデントもありましたけど、1958年の8月、無事国際会議が終了しました。

その当時本当に、ここにおられる宮家先生と宮田先生、他に富倉、鎧、今國學院大学学長の阿部美哉とか、それから鈴木範久、谷口茂と、川又志朗とか、まあ考えてみれば今では大変偉い先生方が、当時院生で、私が下請けで、またその下請け(笑)、という具合で、お手伝いお扶けいただいた。そのおかげで、チームワークが非常によく、まあとにかく国際会議が立派に行われたのですが、私はその会場にはとうとう殆ど入らず仕舞いでしたから、なにが行われていたかよく分からないという裏方に終わりました。それで満足していたんです。

さて、そうこうしておりますうちにそれが終わって翌年(1959年)、まだもう一年博士課程があるから、今度こそ事務を休ませてもらって勉強に打ち込もうと思っていたら、岸本先生からそれはならんと言われたのです。そして一年間また、助手のまた助手みたいなことをやらせてもらいました。と言うのは、先生は昭和35年、1960年から、私を研究室の助手にと考えておられたのです。だから、今ここで研究室から離れたら困ると言われたんですね。それで、仕方なく、と言っては申し訳ないのですが、また一年、無給助手のようなことをつとめて、1960年、国際会議の二年あとに、助手に着任したのです。その同じ時に、柳川助教授が誕生したのです。その1960年は、いわゆる六〇年安保闘争の年でした。柳川先生についてはよくご承知の通りですが、当時の岸本ゼミでは、眠ったような顔をして一番最後に、もっとも的を射た鋭い質問をするので、岸本先生の高い評価を受けておられました。そして岸本先生の後を見事に受け継ぎ、発展されたお方です。

§. 天理教を学問的に学ぶ機縁

さて、その昭和35年、1960年4月に助手になった途端に、先ほどもちょっと触れました小口偉一という宗教社会学の先生が私の所に来て言われるのには、実は今年の九学会連合大会で、発表者を誰にしようか迷っている。丁度いいからお前やれ、とこう言われるんです。「九学会」というのは今ありませんが、民族学、人類学、心理学、考古学、社会学とか、宗教学とか、そういう九つの学会が共同で、調査したり研究発表をする組織で、毎年、年次大会で共通のテーマで研究発表をするのです。上野で開催されていました。その常連に、小口先生の他、柳川啓一先生もおられました。とにかく何でも発表しろと言われたのですが、何を発表していいかわからない。特に九学会は、調査に基づいた研究を発表しなければいけない、ということです。私はその当時まで、理論の研究はやっていただけでも、そういう実地調査はやったことなかった。だから何を発表したらいいかわからないので小口先生に相談したら、お前天理教だろう、天理教なら天理教のことぐらいわかるだろう、天理教のことを資料に基づいて発表したらいいとこう言われるのです。その時の共通テーマは、忘れない「象徴」でした。

そう言われて、私は初めて天理教のことを、まあ学問的というのは変ですが、研究テーマとして勉強するようになったんです。これが昭和35年のことです。それが一つの転機になった。岸本先生はあまり乗り気じゃありませんでした。先ほども言ったように自分の宗教は後回しの立場ですから、天理教のことを私がやることには、あまり賛意を表されなかった。しかし、その時は小口先生に従って象徴というテーマで天理教のことを勉強し始めたのです。天理教の象徴って何だろうといういろいろ考えていくうちに、一番の核心に到達しました。それが、天理教でいう、「かんろだい」、「かぐらづとめ」、それからあの「元初りの話」と、今思っても、その私の着眼点は間違っていなかったと思うんですが、天理教の教義、儀礼の一番の中心のところ目に向けて、それを何とかまあ格好つけて発表することになりました。

その時、私がそういう発表の準備をしてるとい

う話を耳にした中山正善二代真柱が、そういうことをするのならば、わしが直々教授するから、是非来いと言われたのです。ある時天理に呼ばれ真柱邸の応接間で教理、儀礼に関する資料や参考文献をいろいろ教示していただき、また講義のようなものを一対一でしていただいたのです。そして、何でもいいから分らないことがあったら質問しろと言われるので、当時私も若かったですから、ありとあらゆる質問をぶつけました。この二代真柱という人は、単なる天理教の中心人物というだけじゃないんです。今思えば中興の祖ともいえましようが、スケールのほかでかい方で、おそらく財界人になればトップになるだろうし、政界に出ても成功するだろうし、それからスポーツも学問も大好きだった。天理に全国でも有数の図書館や参考館（博物館）、病院を創り上げたのもこの方です。それからスポーツの面では、柔道、ラグビーを始め、水泳、野球、ホッケーと、とにかくありとあらゆるスポーツに関心を持って、その振興を援助していた方です。まあ巨星といえますかね、天理教の枠を越えた大きな星の一つだったと思います。その方は、天理教の原典の刊行にも力を尽くしたほか、もともと学問が好きで、学問的な、主として教理面ですけれども、著書も沢山著しております。そういう方から、いろいろ天理教の教理の根本を教えてもらったという、思い出があるのです。それが私の人生において後々の歩みの大事な伏線になってきます。

さて、その九学会連合での発表は、何とか無事に終わったんです。岸本先生は、この会には滅多に来られないのですけれども、その時は、ご心配だったんですか、会場に来られまして、私の発表をお聞きになって、後で言われるのには、まあいいだろう、まあ、あの位ならいいだろうって（笑）、可でもない不可でもないというような講評をいただいた覚えがあります。

ところが、一方でそれと並行して、私のハーバード大学院留学の話が持ち上がっていました。岸本先生が話を進めて下さっていたのです。ハーバードに、ディビニティ・スクールというのがありますが、その附属施設に、センター・フォー・ザ・スタディー・オブ・ワールド・レリジョンズ、

世界宗教研究センターというのができた、できたばかりなんです。それでその第1回生になるよう手を打って下さったのです。アプリケーション・フォームも私が書くというよりか、岸本先生が書いて下さって、私がサインぐらいして(笑)、願書を出したという、今思うと全く申し訳ない話です。当時英文タイプなどは、できる人が少なかった。岸本先生の秘書のような立場にあった高木きよ子さんが打って下さいました。高木さんは今日は残念ながら行けませんっていうお話でしたけど、行くとも具合が悪かろうというご配慮から来なかったんでしょうね(笑)。岸本先生の口述を、その方がタイプに打つ。それも、自分はこのことやりたいああいうことやりたい、と書くのですが、書けと言われたって私には書けませんから、岸本先生がうまいこと英語で口述して、書いて下さったのです。で、いずれにしてもそのフォームがハーバードに出され、後々それが、一つの大きな意味をもってきます。

ちょうど昭和35年、私が九学会で初めて発表し、アメリカ留学の願書が出た、そのころに、私どもの教会、私の父親に、深刻な問題が起こっていました。ご存知の方もいるかもしれませんが、台東区西黒門町という、あの上野松坂屋のそばにあった私どもの教会が、事情で昭和35年に文京区本郷に移転したのです。現在の本郷5丁目、ここから歩いて五、六分のところですよ。お帰りにお寄り下さいなんて言うと大勢来るから(笑)かなわんですが、すぐそばなんです。余談ですけども後に東大紛争で、研究室が開けられなくなったときに、私どものところで、大事なものをお預かりしたんです。いろいろな学会の書類とか、あるいは研究室の大事な書物とか、資料とか。堀一郎先生や柳川先生が、休憩においでになったこともよくありました。学生の人たちはもう、断りなしに入ってきましたね。そんな、研究室の別室みたいになった思い出もあります。

それはともかくとして、その今の本郷の場所で、神殿を建築するという話になったのです。ところが当時お金がない、今のように銀行融資もない、という状態で、皆の心を寄せるのが大変で、父が非常に苦労しておりました。どれだけ悩み苦しん

でいるか、私はその姿を見てもそれほど深く考えなかったんです。私は「後継者」と目されていましたが、父は私に何も言いません。常々「滋には滋の好きな道を行かせたらいい」と言っていたようです。ところが、翌年、昭和36年、1961年の1月に、その父が天理に行きまして、1月26日という日に倒れたのです。

1月26日は天理教の春の大祭の日なのです。秋の大祭は立教に縁のある10月26日ですが、1月の26日は、中山みき天理教祖の、世間的な言葉で言えば、他界した命日です。明治20年の陰暦正月26日に由来します。教祖は晩年、さんざん弾圧迫害されて、寒いさなかに警察に拘留されたこともありまして。教えからすれば115歳まで生きるはずだったのが、90で現身を隠した。「おやさま」と仰ぎ慕われていた教祖が現身を隠したのは何故か、一言で言えば、人間子供たちの精神的な成長を促すため、親の定命を25年縮めた、ということなのです。親が子供の精神的成長を、急きこむ。親がいつまでも居たのでは、子供は弾圧を恐れてなかなか思うように信仰活動できず、成人も進まないから、親が姿を隠したと、いうふうに教えられています。ですから、1月の26日という日は、同じ大祭ではありますが何となくしみりしたお祭なのです。

その日に父が、天理で倒れたのです。かなりの重病のため倒れた。そしてようよう帰宅した父の姿はとても痛々しかったです。さっそく、東大病院へ連れて行き、胃部のレントゲン写真などの検査を受けたところ、医者は、胃ガンの可能性を示唆したので、愕然としました。とにかく、生命に関わる重病であることに間違いなかったのです。その時、私に、インスピレーションのようなものが走ったのです。私の心にひらめいたのは、天理という信仰の中心地(「親里ぢば」という)で、しかも「1月26日」という日に、自分の父親が倒れたということの持つ重い意味でした。他の人にとってはどうあれ、この私にとっては、私の心の成人というか精神的成長を、親なる神、あるいは教祖(おやさま)が、急きこんでいるしるしだ、というふうに、受け取ったのです。この時は不思議な位、心が素直でした。

岸本先生の初期の論文に、宗教心理学の対象は、宗教体験だけではない、それも大事かも知れないが、「宗教的構え」の研究にまで行かなければいけない、というようなことが、書かれてあります。宗教的構えというのは、「信仰」を言い換えたものだと思います。宗教的な構え、信仰と体験は非常にダイナミックな関係にあります。今私が自分の当時の心を分析しますと、昭和35年に先程言いましたように天理教の根本教理を勉強した。それによって、信仰への素地ができてた。つまり「宗教的構え」が醸成されつつあったと言えます。天理教教祖の教えの根本的なところは理解できていた。しかし、それはまだ「理解」でしかなかった。知識ではあったけども真の意味での信仰までは行っていなかった。その、理解、知識のレベルから、先ほど言いましたように第三の立場というか、まあ「信仰」の段階に入るには飛躍が必要だったのです。その契機が、私にとっては明治20年陰暦正月26日と意味的に重なった昭和36年の1月26日の出来事でした。知識をいかに積み重ねても超越的なものへの信仰には達しないけれども、何かきっかけとなる衝撃的なことがあると、跳躍が起る。現にそういうことがあったのです。宗教心理学の言葉で言えば、「回心」と申せましょうか。

それ以来、私は、心のあり方を根本的に変えるようになったのです。すぐというわけではないけれども、具体的には、話が進んで、入学許可書まで来て、もう決まっていたハーバードへの留学を、急にやめると言い出したのです。これには先生も驚かれました。せっかく、そこまでして下さったのに、当人が行かないと言うのだから、これはどうしようもありません。それだけならまだよかったのです。私は、学問をやめるとまで言い出したのです。留学をやめるついでに学問もやめる。これも今思うと、ある意味で岸本先生に対する大変な「親不孝」だったと言わざるを得ません。先生は癌になられて、あと何年生きられるか分からない状況の中で、自分の残された人生をどういう風に生きるかという計画をお立てになっておられたと思います。その計画の一端に私のことがあったかも知れません。それを覆したのですから。脇本先生が、あの岸本英夫集の解説の中で、岸本先生

自身、「父を捨てる」体験をされたという、話を書いておられます。そのこととはレベルが違いますけれども、私は今思うと、あの時岸本先生を、裏切ったというか岸本先生の恩義に報いることができなかった、まあ要するに「父を捨てた」、そのような思いです。

しかし、それで引き下がるような岸本先生ではありませんでした。先生は、すごい弟子思いというか、後進思いというか、私に限らずいろんな人に心を配っておられたのですが、その昭和36年の、私がかがままを言い出した、1月末から2月にかけて、私に対して岸本先生の熱心な説得が続きました。私だけではありません。家内も呼び出されて、一ツ橋の学生会館で、お昼をご馳走になりながら、もう色々、話をして下さいました。教会長なんて奥さんがやればいだろうとかです、まあ、いろんなこと言われました。だけど私も頑固で、大変な親不孝でありまして、岸本先生の言うことをすぐには聞けなかった。これも若さのせいでしょう。そもそも信仰への決断というのは、そんなに簡単にひっくり返すものではない、という信念もあったからです。

そこでさすがの岸本先生も万策つきたような感じで、相談された相手が、中山正善二代真柱でした。先生とは友人関係でもあったし、気安い仲で、先生も天理のことをよく御存じでした。真柱はその天理教団のトップですから、トップの言うことなら聞くだろう。カトリックほどではないけれども、例えばローマ教皇の言うことには信者なら誰でも絶対服従ですから、天理教の組織もそうだろうと思われたのだと思うのです。中山から言ってもらえば、松本も私（岸本）の言うこと聞くだろうと、このくらいにお考えになったかと思えます。それで、日は忘れましたが、2月のある日に、私の家に真柱から電話が掛かってきて、呼び出されたのです。銀座に、有名な寿司幸というお寿司屋さんがあるんです。皆さん方行ったことがあるかどうか分かりませんが、それはとてもおいしいところ、そこ二階に呼ばれました。その二階へ上がって驚いたのは、そこに岸本先生もおられたのです。岸本先生と中山正善二代真柱という、仰ぎ見るようなお二人の方が並んで座って

おられるのではないですか。そこで恐縮して平伏を
すると、まあ寿司でも食べ、と言われたのですが、
とても食べられたものではありません。最高のト
ロだけれども、手が出ないし喉も受け付けるよ
うな状態じゃありません。

その時岸本先生が言われるのには、わしは、あ
んたに期待していたけれども、留学はのばすにし
ても、学問まで捨てるなどと言う。しかも、それ
がなかなか頑固で、学問だけは続けると言ってい
るのに、なかなか言うことを聞かないので、あ
んたのことを中山に一任することにしたと、こう言
われたのです。つまり、真柱に一任したから、中
山の言うことを聞けど、こう岸本先生が開口一番
言われた。今思うとよくここまで、研究者の卵の
卵みたいなものに心を掛けて下さったと思って、
本当に感謝の気持ち一杯で、今なおその熱意に頭
が下がる思いです。

その時、中山正善真柱(当時)が、言われたこと
を要約したのが、お配りした資料の二番目のとこ
ろです。二代真柱は先ほども言いましたように非
常に優れた方で、しかも私のことを目に掛けて下
さっていたのですが、岸本先生から任せたと言わ
れて、おそらく当惑されたことと思います。とい
うのは、天理教のトップとして、その教団内部の
ものが、天理教のために働こうと言っているのを
止めるのもおかしいし、さりとて岸本先生の言う
ことも理解できるし、できれば松本に学問をさせ
たいというので悩まれたのではないかと推察し
ます。がその末に言われたのがこの言葉でした。
「わしは、教会に生まれ育ったものが教会の上に
働こうと思って帰ってきた、その気持ちはとても
嬉しい。だが、教会にいる者は学問をやってはい
かんとか、あるいは学問をする者は教会にいては
いかんとか、そういう狭い考えはやめろ。人はよ
く釣りだとか、今ならゴルフだとか、あるいは映
画だとか、趣味持ってるだろう。お前は教会入っ
ても、趣味としてでもいいから学問を続けてもら
いたい。」と、そういう意味のことでありました。

その時は、その言葉の、なんて言うか、深い意
味まで分かりませんでした。二人の大人物の前
で、私はただ「はい」と言う外ありませんでした。
が28歳位の若さでしたから、若気の至りという

か、純粋な心であったというか、私は何を言われ
ても決心を変えるつもりはありませんでした。し
かし、結局、後々その言葉が、生きてくることにな
るのです。

§. 信仰と学問と

その年の2月以降、新年度が始まってからも、
私は研究室の助手の立場は続いていたのですが、後
輩の院生の人たちに全部仕事を割り振って、願
いして、自分は研究室の仕事から遠ざかっており
ました。自分では純粋に信仰一筋に生きるつもり
でいたのです。岸本先生にあれだけ言われて、中
山正善二代真柱にあのように言われても、なおかつ
私は、そういうふうにはすぐにはなれなかった。
しかし、岸本先生のすごいというか偉大なところ
は、あれだけのことがあって後でもあきらめない
で、私をハーバードへ送り込むことを考え続けて
下さったということです。しかもご自分はその当
時、癌の手術、再手術、再々手術の繰り返しでし
た。普通なら人のことを考える余裕などないと思
うのです。図書館改革その他のお仕事でも忙しい
日々を送っておられた。手術の直後、頭に包帯を
巻いたまま教壇へ登られたことも、しばしばあり
ました。痛々しいぐらい、血がにじんだような状
態で、今手術してきたんだ、と平然と言われてい
ました。そういうような時もあったのですが、と
にかく私は、ハーバードなんてことは全く考えて
いなかったのです。

ところが、今思うと、前の年の願書が生かされ
たのでしょうか、前の年にアプライして、合格の
返事が来ていたのを先生がおそらく先延ばしし
て作り直して下さっていたのでしょうか。それとは
知らず私はその翌年、昭和37年、1962年の1月
から3月まで、天理の修養科という所に入って、
もっぱら修養生活していたのです。その修了間際
に、ハーバードからの合格通知と世界宗教研究セ
ンターのスカラシップ許可の知らせを受け取った
のです。合格通知が来て、嬉しくないわけがない
んですが、しかし今まで自分が突っ張ってきた立
場、簡単にも受けられない。第一私の父の体が
心配だし、教会の状態もあるし、どうしようかと
思って、その時も悩みに悩みました。

こういう状況の中で、偶然、神田神保町の角で、二代真柱の車と出会ったのです。広い東京で、全く不思議なことでした。その時、二代真柱の言われたことは、ごく簡単で、ああ行ける時には行けということでした。教内ではそれが物を言います。そのお墨付きが出たので、周りのものも認めてくれて、その1962年の7月から、アメリカへ行くことに結局なったのです。

実の所、最初話のあった年、1961年の夏から行くと、私はその一年で帰国して、翌年柳川先生が行くというように、入れ替わりになるという話だったのです。ところが、1962年、昭和37年に行くときには、岸本先生は何を言われたかということ、お前は、何年でも行っていると言うのです。一年で帰るな。もう二年でも三年でも四年でもいられるだけ行ってなさい。ある意味で言うと「島流し」みたいなものです。というのは、松本は帰ってくると天理教になってしまうから(笑)、なるべく向こうに行ってる、こういうお考えだったらいいのです。それで、旅費のお金がありませんから、フルブライトのトラベルグラントを取りました。このフルブライト、トラベルグラントは、井門先生はよくご存じですが、ヒヤリングの試験の他に面接があるんです。面接の時、二、三のアメリカ人の試験官がいて、英語で問いかけても私はよく答えられないで、もたもたしていますと、一人の人が助太刀を出してくれました。お前はプロフェッサー岸本の弟子かと言うから、その位は分かりますのでイエスイエスって(笑)。そのお蔭で通ったようなものです。渡米前には英会話も習ったのですがちっともうまくなならない。英会話と言うのは、本当に難しいものです。とにかく、岸本先生の名前でトラベルグラントを頂いて、あちらではセンター・フォー・ザ・スタディー・オブ・ワールド・レリジョンズのスカラシップをもらって、留学生活が始まったのです。

それでも私は、父の病気等のこともあるので、最初、一年で呼び返されるか二年で呼び返されるかと思ってましたが、一年一年と延びて、結局は四年と八カ月、丸五年近く、あちらにいて、先ほどご紹介ありましたように、Ph.D.論文を仕上げ、昭和42年(1967年)4月に帰って来たので

す。話はその辺までですが、その間に、昭和39年、1964年の1月25日、岸本先生は他界されているのです。

そのちょっと前、これは岸本英夫集の第4巻に記した私の解説の中に書いてますが、その前の年、昭和38年だったと思います、ワシントンからハーバードにいた私の所に電話が入るんです。秋のことでした。それはなんと岸本先生の声でした。もっともその一年前にアメリカにいらしたときにもお会いしているのですが、電話の時は、ボストンのほうへ来られる予定はなかった。何かと思ったら、電話で慌ただしく、お前は何月何日に、シンシナティへ行ってくれと、こう言われる。どうしたんですかって言うと、いや、実は今日倒れたんだと、会議のさなかに倒れて、とてもそっちへ行けそうもないから、シンシナティの何とかいう会議に、お前行ってくれと。そのためのペーパーとスライドを送るから、それを読んで、スライドの説明は適当にやってくれればいいいからと、こういう話なのです。先生はそれから後だんだん悪くなられて、翌年1月に亡くなるんですが、その電話ではご自身のことをあまり重いようにはおっしゃらないで、むしろお前元気か、勉強のほうは大丈夫か、生活も大丈夫か、そういうことばかり心配して下さったのです。これで電話が切れました。私は本当に驚きましたけれども、とにかくその通りにやらせてもらったのです。

それでも、昭和39年、1964年の1月25日に亡くなった時は、私は帰るわけにいかない。今は飛行機で往復がかなり自由ですけど、当時はそんな簡単には往復できないし、第一そのお金もありませんでした。当時としては仕方なかったこととはいえ、今もって心残りです。ハーバードのセンターの先生などは、松本にこの知らせを伝えようかどうか、悩んだと言っておられました。なぜかという、私はちょうど大事な期末試験の最中でしたから、松本に知らせると、ショックであいつは試験に落ちるんじゃないかと、心配をして下さった、ということでした。

おわりに

とにかく、こういうわけで私の20代は過ぎました。30代以降になってからも、学問と信仰の二筋道といいますか、それはずうっと続いてきました。どちらも大変な仕事で、私には土日っていうものがなかったです。天理教のサイクルは月単位で動くし、大学のサイクルは週単位で動くし、片方休んでももう片方は休めない、という状況が、ずうっと何十年も続きました。ただそのおかげで、宗教学の研究者の端くれとしては、宗教（心）を主体の内側から見ることができました。これは、非常に微妙なところですが、信仰者の立場で宗教を知るということはできたと思います。また信仰者としては、宗教学を勉強したおかげで自分の宗教あるいは信仰を、広く深く見つめる、見直すということができ、非常に有り難かったと思っています。

最後に、お配りした参考資料の最後の所ですが、これはあの「父親」の一人には挙げませんでした、準父親みたいな、ウィルフレッド・スミス先生、これはセンターでお世話になった方ですが、その方の、講義をうかがったとき印象に残った言葉の要約です。それはスミス先生の宗教学の立場を、よく表していると思って、記させてもらいました。

「ある一つの宗教について論述する場合、それが一定の知的水準をもったその宗教以外の人々に理解可能であり、かつ、その批判に耐え得るような内容を保持していること、しかも、同時にその宗教の自覚的信仰者によって納得承認され得るような叙述であること、この二つの面を併せ持つことが肝要である」、こうおっしゃってます。ご承

知のように、スミス先生はイスラム教を研究しておられました。御自身はクリスチャンです。だからイスラム教のことを書く場合に、それは学問的には勿論、イスラム教の信者にとっても、納得できるものでなくてはならない、ということです。そういうことを、常に念頭に置いて、ものを書いたり、話したりなさっておられたと思います。

私も、そういうような、いうならば「二重の課題」に取り組んできたつもりですが、そういう生き方が、何とかできたのも、今日お話した、「三人の父親」のおかげに他なりません。信仰を、自分の生き方を通して伝えてくれた実父、そして学問の道へ、手をとって引っぱり込むように導いてくれた岸本英夫先生、それから信仰と学問の二者択一ではなくて、それを統合する道のあることを教えてくれた中山正善二代真柱。この三人です。そういうわけで、私の人生、少なくとも過去四十年、これは、学問の世界と信仰の世界の間（はざま）を、かろうじてバランスをとりつつ、しかし自分としてははっきりした使命感を持って生きてきたつもりです。そして、二つの世界の重なりの中で、自分のアイデンティティを求め見つけてきた、半生であったと、今思っています。

こういう機会をお与えただいて、自分の精神遍歴の、ごく一端ですが、特に20代のことをまとめて話す機会を与えて下さった、東大の研究室のスタッフの方々、嘲風会、そして今日拙い話を聞いて下さった方々に、心から御礼申し上げて、ちょっと長くなりましたが、話を終わらせていただきます。どうぞ静聴有り難うございました。（拍手）

（2001年12月23日嘲風会フォーラム講演録）